

露川火山砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

富貴寺遺跡（東地区）

2001

大分県教育委員会

落川火山砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

富貴寺遺跡（東地区）

序 文

本書は大分県教育委員会が大分県土木建築部の依頼を受けて、平成12年2月14日から3月14日までの間に実施した、
落川火山砂防事業に伴う富貴寺遺跡（東地区）の埋蔵文化財
発掘調査の記録です。

遺跡の所在する豊後高田市の落川流域は、国東半島のほぼ
中央部に位置する自然豊かな地域であります。歴史的にみても
六郷山寺院に代表される建造物や石造物が数多く残されて
おり、往時の面影を漂わせています。

調査の結果、遺跡からは中世を中心とする遺構・遺物が発
見されましたが、この成果は当地域の歴史を解明するうえで
重要なものであります。

今後、本書が埋蔵文化財に対する保護・啓発並びに学術研
究の一助となれば幸いです。

最後に、この発掘調査に多大なる御協力をいただきました
関係各位に対して、衷心より感謝申し上げます。

平成13年1月31日

大分県教育委員会教育長

田 中 恒 治

例 言

1. 本報告書は平成12年2月14日から3月14日にかけて実施した麓川火山砂防事業に伴う富貴寺遺跡（東地区）の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 埋蔵文化財発掘調査は大分県土木建築部の依頼を受けて大分県教育委員会が実施した。
3. 遺物の整理作業は大分県教育庁文化課文化財資料室整理補佐員がおこない、遺物の実測・トレースは大分県教育庁文化課職員及び同資料室整理補佐員があたった。
4. 出土遺物及び関係資料は、大分県教育庁文化課文化財資料室で保管している。
5. 挿図に使用した座標系は昭和43年建設省告示第3059号の規定による第Ⅱ座標系である。図郭に表示してある座標値はキロメートル単位である。
6. 本書の編集・執筆については大分県教育庁文化課 副主幹 栗原 眞、同文化課 主任 染矢和徳、同文化課 嘱託 戸崎 文が行なった。

本 文 目 次

I. 調査の概要	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 調査の経過	1
II. 地理的歴史的環境	1
1. 地理的環境	1
2. 歴史的環境	1
III. 調査の成果	5
1. 調査の概要	5
2. 遺構と遺物	5
IV. まとめ	14

挿 図 目 次

第1図 富貴寺遺跡(東地区)周辺遺跡分布図	2
第2図 富貴寺遺跡(東地区)周辺地形図	3
第3図 富貴寺遺跡(東地区)遺構配置図	4
第4図 1号掘立柱建物跡実測図	5
第5図 1号土坑実測図	6
第6図 A区出土遺物実測図	6
第7図 2号掘立柱建物跡実測図	7
第8図 B区出土遺物実測図	9
第9図 C区出土遺物実測図(1)	11
第10図 C区出土遺物実測図(2)	13
第11図 C区出土遺物実測図(3)	14

図 版 目 次

図版1 富貴寺遺跡(東地区)遠景	富貴寺遺跡(東地区)調査区全景
富貴寺遺跡(東地区)調査区近景	富貴寺遺跡(東地区)調査区近景
図版2 富貴寺遺跡(東地区)出土土師質小皿	富貴寺遺跡(東地区)出土土師質土鍋
富貴寺遺跡(東地区)出土瓦質捏鉢	富貴寺遺跡(東地区)出土瓦質播鉢
富貴寺遺跡(東地区)出土瓦器椀	富貴寺遺跡(東地区)出土輸入磁器
富貴寺遺跡(東地区)出土磨製石斧・硯	

I. 調査の概要

1. 調査に至る経過

大分県土木建築部では麓川火山砂防事業を平成8年より実施している。当該区は富貴寺遺跡の範囲のなかに所在することから、埋蔵文化財の取り扱いについて平成11年4月30日より大分県教育委員会と協議がもたれた。麓川の流れる谷部には国宝『富貴寺大堂』など、数多くの文化財が残されており、調査区にもこれらに関連する遺跡の広がりが想定されたため、埋蔵文化財発掘調査の実施を決定した。これを受け平成11年11月8日に試掘調査を実施し、遺構・遺物が確認されたため本調査の実施を決定した。本調査は平成12年2月14日から3月14日まで実施した。

参考文献

栗原 眞『県指定有形文化財 其ノ田板碑』大分県文化財調査報告書第106輯 大分県教育委員会 2000

2. 調査の組織

平成11年度

調査主体 大分県教育委員会

教育長 田中恒治

文化課長 山本芳直

調査主任 清水宗昭（同文化課課長補佐兼埋蔵文化財第2係長）

調査員 栗原 眞（同文化課主査）

戸崎 文（同文化課嘱託）

3. 調査の経過

調査は平成12年2月14日から3月14日に行なった。調査区は麓川南岸の河岸段丘上に設定され、調査面積は2000㎡である。表土は重機で除去し、遺構・遺物の精査は調査補佐員の手作業により実施した。精査の結果、掘立柱建物跡、土坑、ピット群などを確認した。

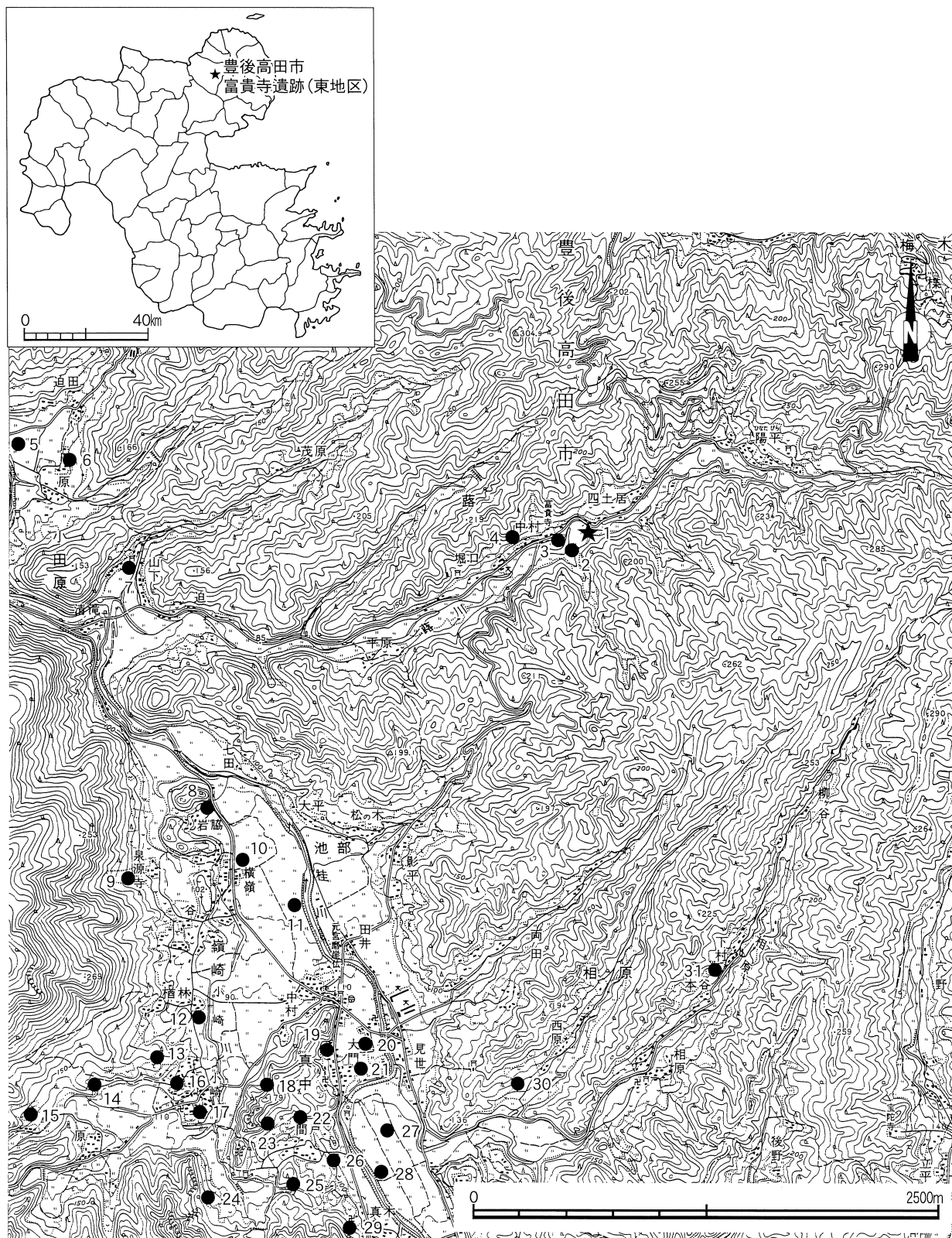
II. 地理的歴史的環境

1. 地理的環境

富貴寺遺跡の所在する豊後高田市は、大分県北東部の国東半島の付け根に位置する。当市は東を大田村と安岐町、西を周防灘、南を宇佐市、山香町、北を真玉町に接している。気象は概ね瀬戸内海型とされるが、冬期は曇天が比較的多く気温が低いため、準日本海型の気候区に属する。市域の地形は西部に桂川や広瀬川等の河川が織り成す沖積低地が広がり、主に水田となっている。東部は国東半島の山地とこの山々を開析する小河川が創りだす狭長な沖積谷や田染盆地のような小盆地が散在する。地質は耶馬溪層上部層と言われる凝灰角礫を含む火山碎屑岩層が地表面に分布しており、加工が容易なこの凝灰岩は石造品を生む素地となった。調査区は市東部の桂川支流である麓川中流の東岸に位置している。区内は近世以前の開発により攪乱、削平されたものと考えられ、最近まで水田として用いられていた。

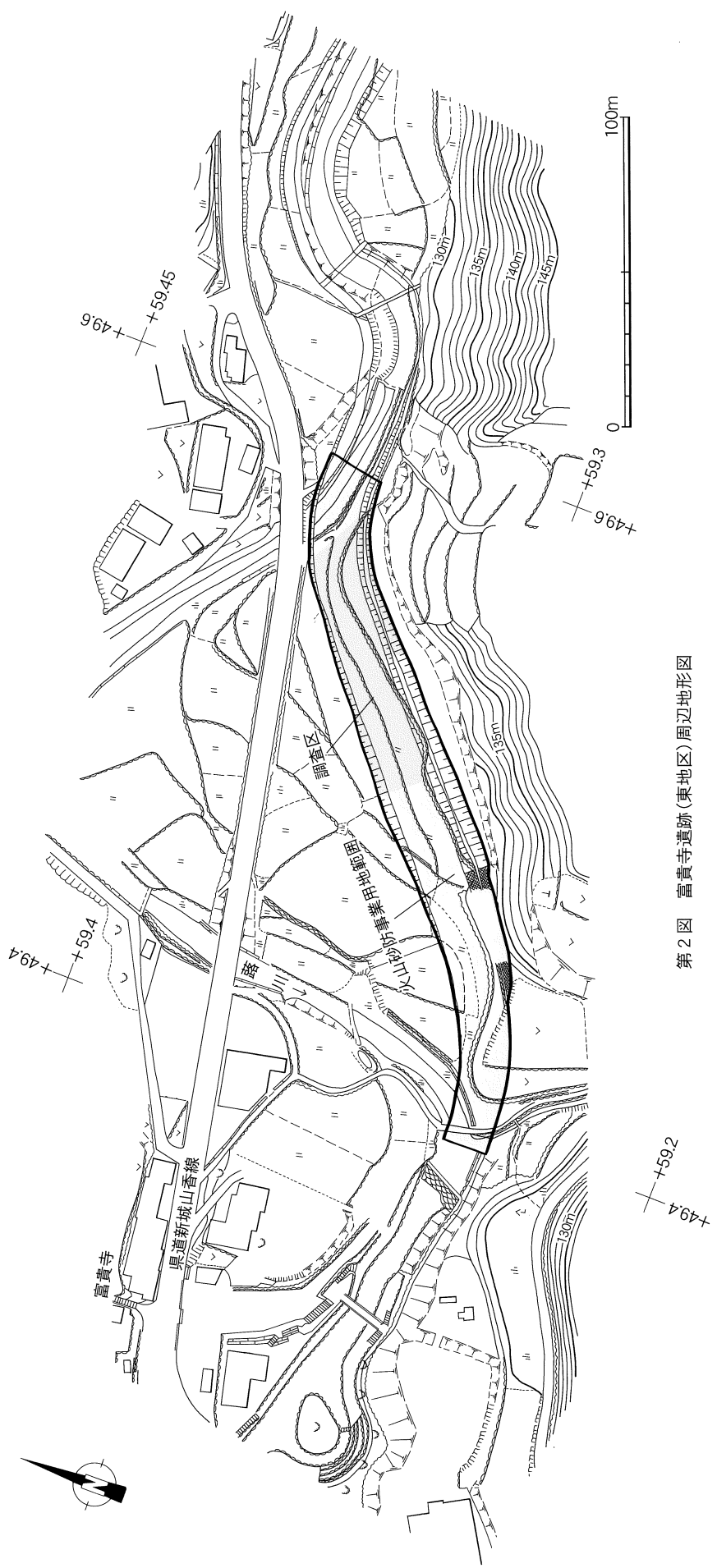
2. 歴史的環境

調査区周辺の遺跡をみると、縄文時代では早期の石鏃等が出土している野地台遺跡や後期の森貝塚、来縄貝塚等が確認されている。弥生時代になると随所に遺跡が分布しており、県下でも数少ない板付式土器が出土した水崎貝塚や、前期から中期の大規模集落跡と推定される戸原台遺跡等が発見されている。古墳時代では市内に40基余りの古墳が確認されており、その多くが後期の円墳として知られている。古代から中世にかけては宇佐神宮領の一つとして田染庄が成立するが、武家勢力の台頭とともに宇佐神宮の影響力は衰え大友氏の所領となっていく。しかし、天台宗と結びついた宇佐神宮は山岳仏教に転じ、国東半島に六郷山仏教文化を開花させた。半島には65箇所の寺院があるが、麓地区には本山本寺8箇所のうち西叡山高山寺、馬城山伝乗寺が置かれている。本山末寺である富貴寺の大堂は国宝に指定されているほか、当地域では随所に石造品等がみられ往時の栄華を漂わせている。

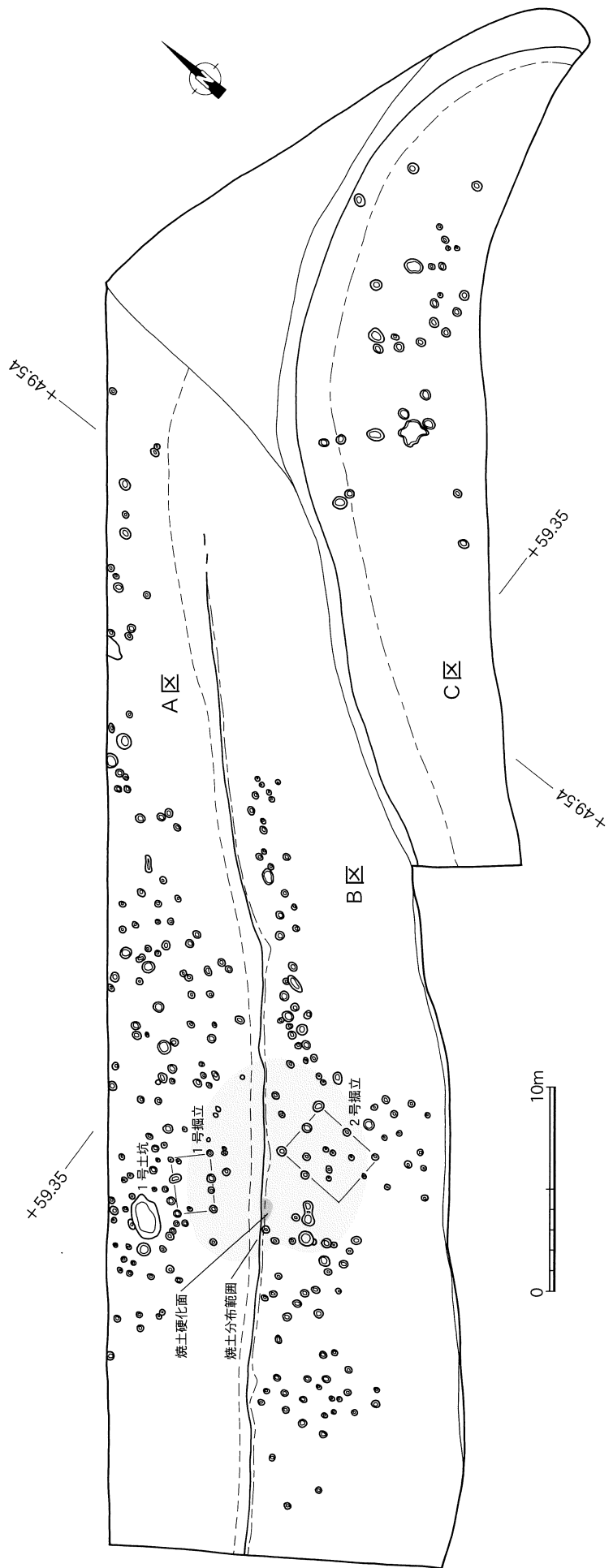


第1図 富貴寺遺跡(東地区)周辺遺跡分布図(国土地理院二万五千分の一地形図「両子山」より転載)

- 1.富貴寺遺跡(東地区) 2.仏正田遺跡 3.富貴寺 4.落政所跡 5.縄手添遺跡 6.久保ノ上遺跡 7.清流寺(清滝寺)
- 8.岩脇寺跡 9.泉源寺跡 10.愛敬寺跡 11.池部・横嶺条理 12.堀ノ内館跡 13.野地台遺跡 14.赤迫遺跡
- 15.西ヶ平遺跡 16.上ノ平遺跡 17.小崎城跡 18.長野観音寺跡 19.大門坊跡 20.観音寺跡 21.戸原台遺跡
- 22.大平第2遺跡 23.穴井戸洞穴 24.宝珠院跡 25.間戸寺跡 26.上草場遺跡 27.上野条理 28.上野遺跡
- 29.大久保城跡 30.西原遺跡 31.相原政所跡



第2図 富貴寺遺跡(東地区)周辺地形図



第3図 富貴寺遺跡(東地区)遺構配置図

Ⅲ. 調査の成果

1. 調査の概要

遺跡は大分県豊後高田市大字落字中田に所在するもので、調査期間は平成12年2月14日から3月14日である。調査区は富貴寺遺跡の北東端の河岸段丘に位置するもので、現状は水田として用いられており、階段状に設けられた石垣により三段に削平されていた。調査は重機により表土の除去を実施したのち、調査補佐員の手仕事で遺構・遺物の精査を行なった。調査区内の土砂堆積状況は腐食土（現代の表土層：水田床土）を取り除くと直ちに遺構検出面である黒褐色土及び暗茶褐色土が露出する。黒褐色土及び暗茶褐色土は前述した石垣の裏込め土に用いられたもので、確認された遺構は石垣構築後に設けられたことになる。裏込め土直下には地山と考えられる褐色土（礫を含む）が北西下りに緩斜面を形成している。遺構検出面より確認された遺構は掘立柱建物跡2棟、土坑1基、ピット群、焼土硬化面及び焼土の広がり確認された。遺物は裏込め土内から出土していることから、遺構に伴う可能性は低く、むしろ客土に起因するものと推定される。本報告は調査の手順に従い、石垣により三段にわけられた区域を標高の低い地区からA区～C区と設定して行なう。

2. 遺構と遺物

A区の調査

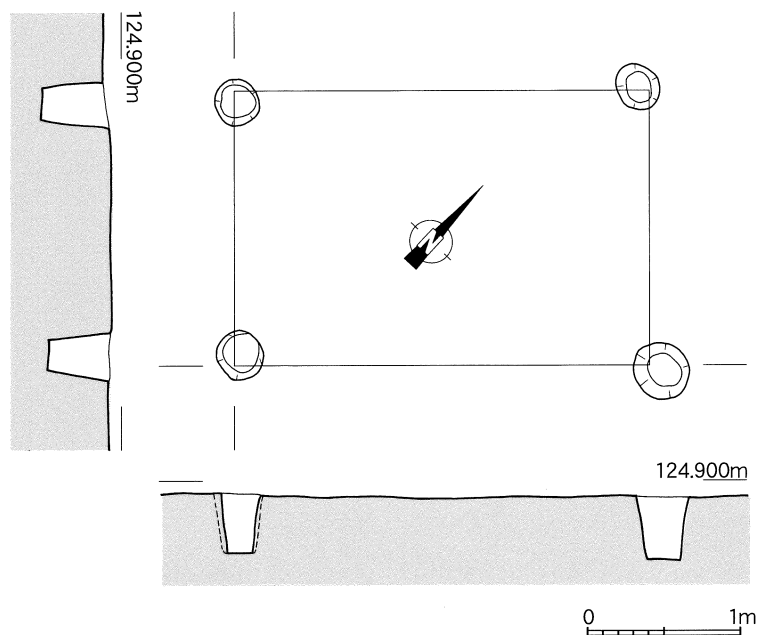
A区は調査区の最も北側の平坦面である。標高は124.700m前後で、B区との比高差は1m前後となる。区内からは掘立柱建物跡1棟、土坑1基、ピット群、B区より続く焼土の広がり確認した。焼土についてはその性格が判然としないことから第3図に分布範囲を記すに止める。

1号掘立柱建物跡

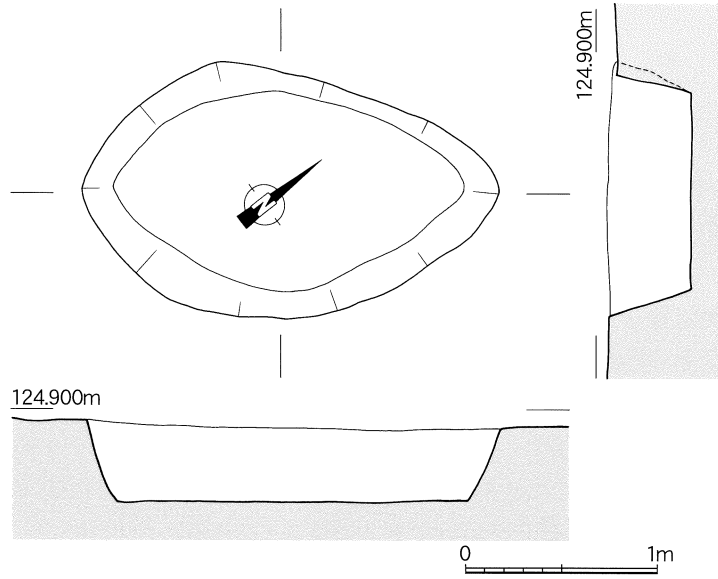
A区の中央部西側に位置する。平面プランは長方形で、規模は桁行2.76m、梁行1.84mである。柱穴の深さは40cm前後である。遺構に伴う遺物は出土していない。

1号土坑

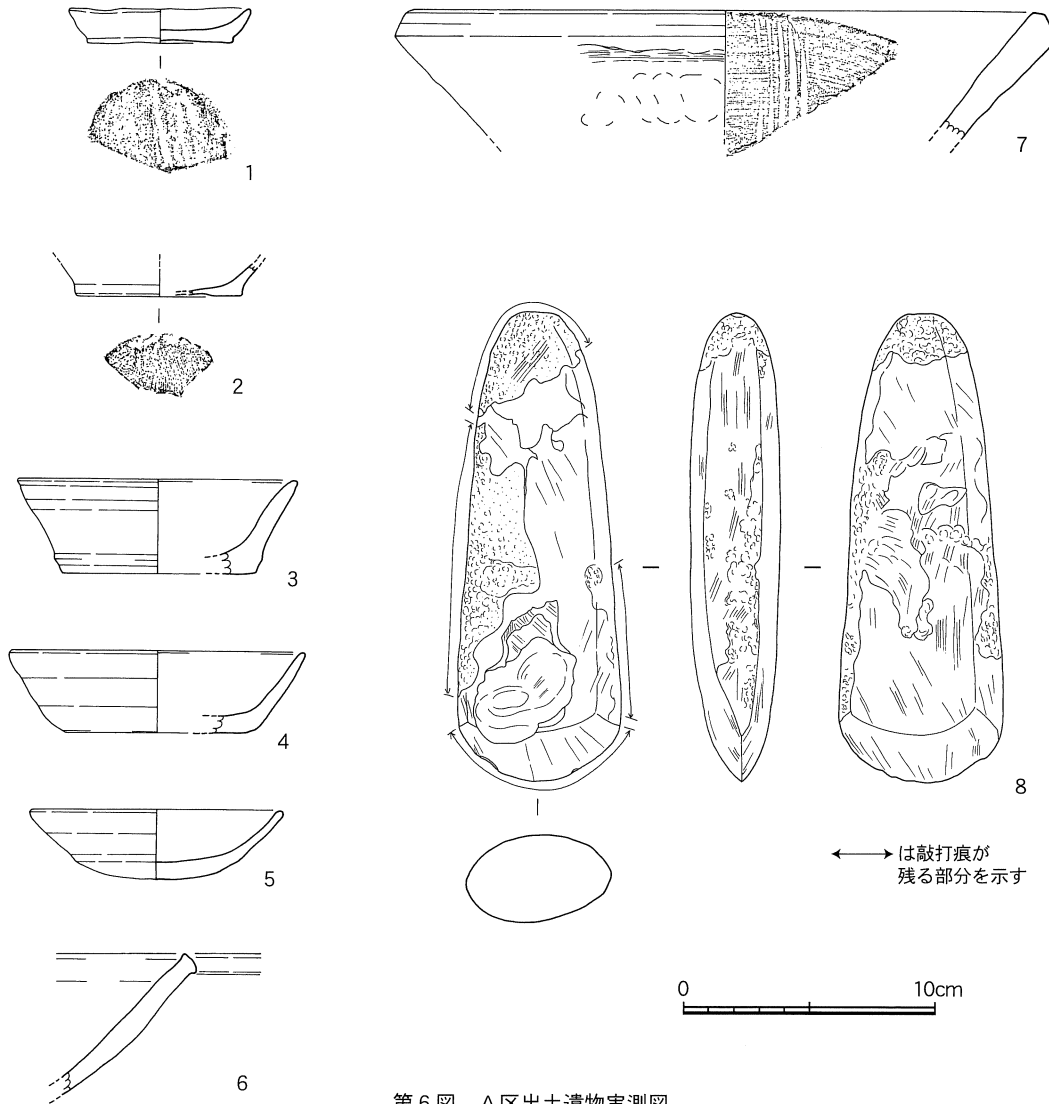
A区の中央部西側に位置する。平面プランは歪んだ短楕円形で、規模は2.18m×1.31m、最大深42cmである。遺構に伴う遺物は出土していない。



第4図 1号掘立柱建物跡実測図



第5図 1号土坑実測図



第6図 A区出土遺物実測図

A区出土遺物

1～8はA区遺構精査時に出土した一括遺物である。1は土師質小皿で、胎土には長石・角閃石・赤色粒が含まれる。内面調整は不定方向ナデで、外面は横ナデと糸切り後の板状圧痕が残存する。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。復元口径7.2cm、器高1.4cm、復元底径5.8cmである。

2～4は土師質坏である。2の胎土には角閃石が含まれる。内面調整は横ナデで、外面は横ナデと糸切り痕が確認できる。焼成は良好で色調は内外面ともに明黄褐色である。復元底径6.6cmである。3の胎土には角閃石と赤色粒が含まれる。内外面の調整は横ナデであるが、外面底部は劣化のため調整不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。復元口径11.0cm、器高3.7cm、復元底径7.6cmである。4の胎土には角閃石と赤色粒が含まれる。内外面の調整は横ナデで、外面底部には糸切り痕がみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄褐色である。復元口径11.6cm、器高3.3cm、復元底径7.1cmである。

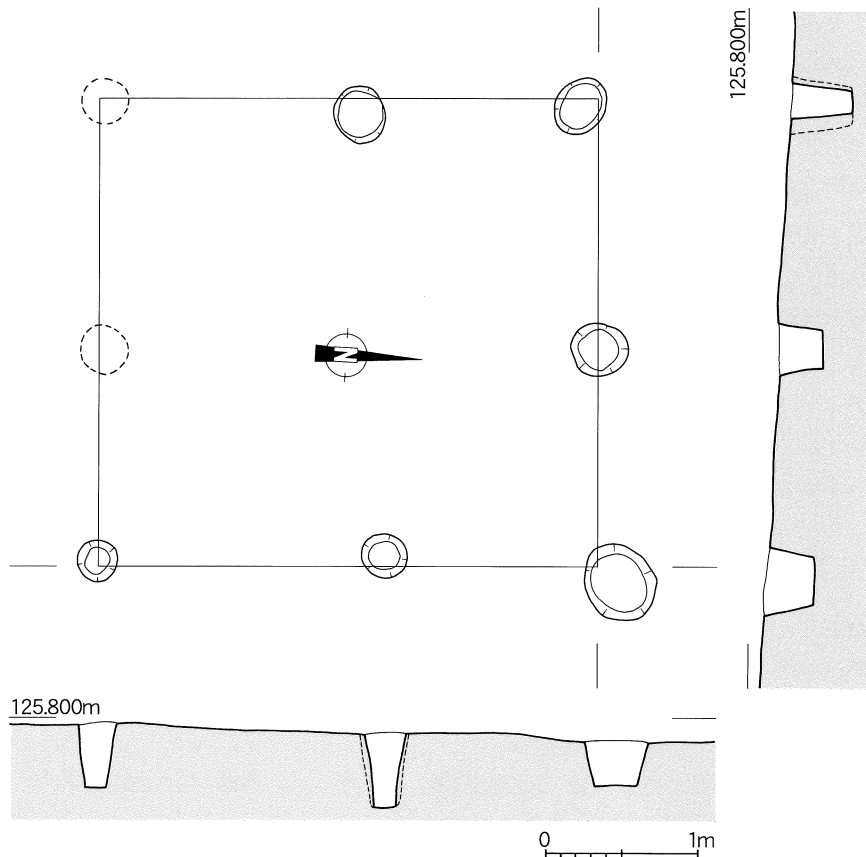
5は瓦器椀で、胎土には角閃石が含まれる。内外面ともに劣化が著しく調整は不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色と灰白色である。復元口径10.0cm、器高2.8cmである。

6は瓦質捏鉢で、胎土には長石・角閃石・石英が含まれる。内外面の調整は横ナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内面が灰褐色、外面が黒褐色である。遺物は二次加熱を受けており、外面全体に煤の付着がみられる。

7は瓦質播鉢で、胎土には石英が含まれる。内面調整は横ナデとクシ目で、外面は横ナデ・ハケ目・指圧痕が残存する。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄灰色である。復元口径26.2cmである。

1～7は15世紀代を中心とする時期と考えたい。

8は頁岩製の磨製石斧である。長さ18.5cm、幅5.7cm、厚さ3.5cm、重量610.2gである。敲打整形ののち研磨しており、縄文時代後期の遺物と考えられるが、土器の出土はない。



第7図 2号掘立柱建物跡実測図

B区の調査

B区の標高は125.700m前後で、C区との比高差は2m程となる。区内からは掘立柱建物跡1棟、ピット群、焼土硬化面と焼土の広がりを確認した。焼土硬化面と焼土についてはその性格が判然としないことから第3図に分布範囲を記すに止める。

2号掘立柱建物跡

B区の中央部西側に位置する。平面プランは長方形で、規模は桁行3.34m、梁行3.10mである。柱穴の深さは30～50cm前後である。遺構に伴う遺物は出土していない。

B区出土遺物

9～22はB区遺構精査時に出土した一括遺物である。23はB区中央部に広がる焼土層内から出土した遺物である。9～15は土師質小皿である。9の胎土には長石・角閃石・赤色粒が含まれている。器面の調整は内外面ともに横ナデである。外面底部は剥離のため調整不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに浅黄橙色である。復元口径6.0cm、器高1.3cm、復元底径4.8cmである。10の胎土には角閃石が含まれている。内面調整は横ナデと不定方向ナデである。外面調整は不定方向ナデがみられるが、底部は劣化のため調整不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗橙色である。復元口径7.2cm、器高1.3cm、復元底径5.6cmである。11の胎土には長石・角閃石・赤色粒が含まれている。内面調整は横ナデと不定方向ナデである。外面調整は横ナデと糸切り痕がわずかに確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに浅黄褐色である。口径7.2cm、器高1.4cm、底径5.4cmである。12の胎土には長石・角閃石・赤色粒が含まれている。内面調整は不定方向ナデである。外面調整は横ナデが確認できるが、底部は劣化のため調整不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。口径7.2cm、器高1.4cm、底径5.8cmである。13の胎土には長石・角閃石・赤色粒が含まれている。内面調整は横ナデと不定方向ナデである。外面調整は横ナデと糸切り痕が残存している。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄橙色である。復元口径7.0cm、器高1.5cm、復元底径6.0cmである。14の胎土には長石・角閃石・赤色粒が含まれている。内面調整は横ナデである。外面調整は横ナデと糸切り後の板状圧痕が残存する。焼成は良好で、色調は内面が黒褐色で、外面は橙色である。復元口径7.6cm、器高1.2cm、復元底径6.0cmである。15の胎土には長石と角閃石が含まれている。内面調整は不定方向ナデである。外面調整は横ナデ及び糸切り後の板状圧痕が確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに褐色である。復元口径9.5cm、器高1.5cm、復元底径8.5cmである。

16は土師質珉の底部片である。胎土には長石と角閃石が含まれている。内面調整は不定方向ナデである。外面調整は横ナデと糸切り痕が残存している。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡褐色である。復元底径8.6cmである。

17～19は土師質土鍋の口縁部片である。17の胎土には長石・角閃石・赤色粒が含まれている。内面調整は不定方向ナデである。外面調整は口唇部に横ナデが確認できるが、鏝以下は剥離のため調整不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに暗褐色である。遺物外面には部分的に煤の付着がみられる。18の胎土には長石・角閃石・赤色粒が含まれている。内面調整は横ナデとハケ目である。外面調整は横ナデと指圧痕が確認できる。焼成は良好で、色調は内面が黄褐色で、外面は茶褐色である。遺物の外面には部分的に煤の付着がみられる。19の胎土には長石と角閃石が含まれている。内面調整は横ナデである。外面調整は横ナデと指圧痕がみられる。焼成は良好で、色調は内面が黄褐色で、外面は黒褐色である。遺物の外面には部分的に煤の付着がみられる。

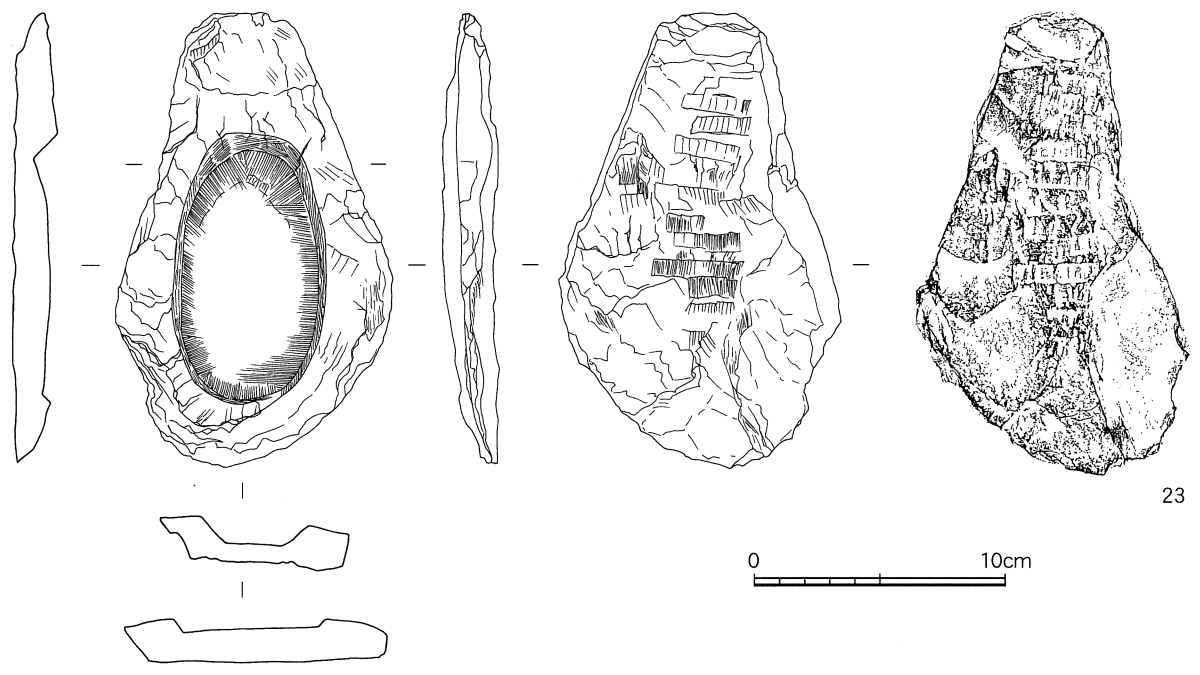
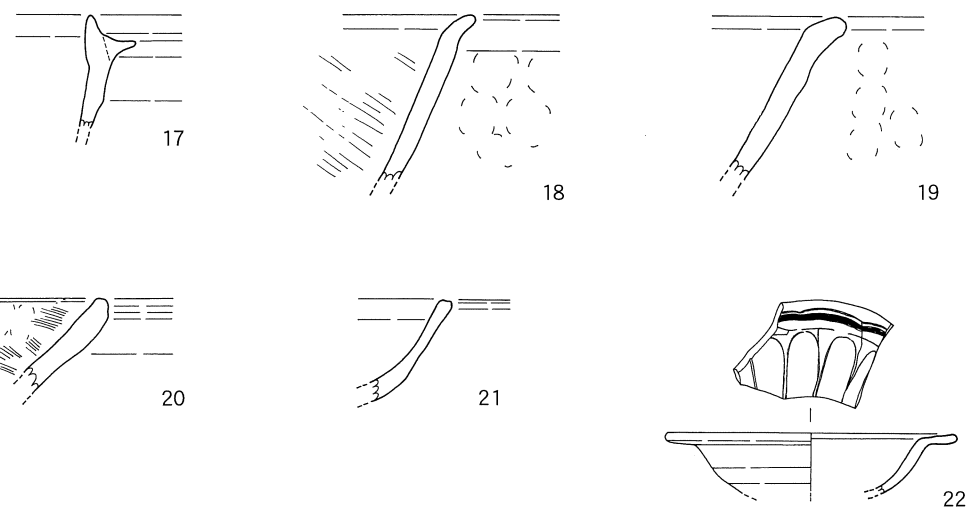
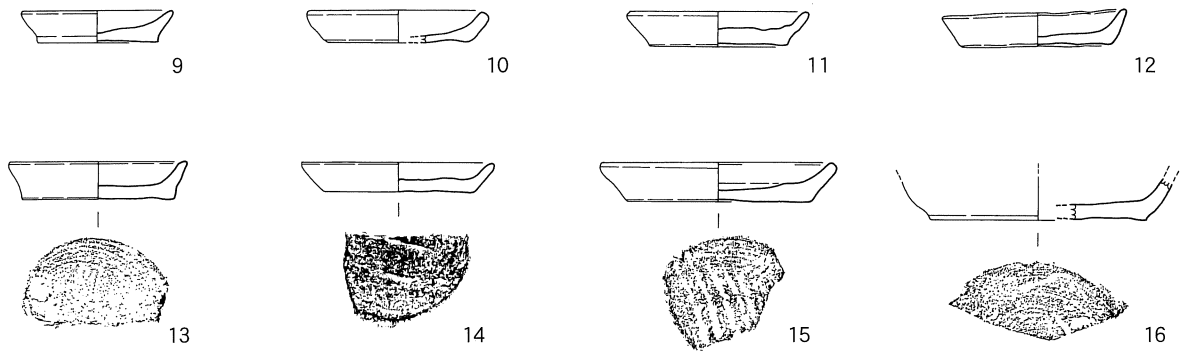
20は瓦質捏鉢の口縁部片である。胎土には石英がわずかに含まれている。内面調整はハケ目と指圧痕である。外面調整は横ナデと不定方向ナデが確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。

21は瓦器碗の口縁部片ある。角閃石がわずかに含まれている。内外面の調整は劣化のため不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色と灰白色である。

22は龍泉窯系青磁坏（Ⅲ類）である。胎土は灰白色で、釉の発色は青味がかかった緑色である。内面には削り落としの菊弁紋が施されている。復元口径11.6cmである。

23は頁岩製の硯で、裏面にはノミ痕がみられる。長さ17.8cm、幅10.3cm、厚さ1.8cm、重量385.8gである。

9～23は13～14世紀代を中心とする時期の遺物群と考えたい。



第8图 B区出土遗物实测图

C区の調査

C区は調査区の最も南側の平坦面で最高所にある。標高は127.500m前後で、区内東側にピットが集中して広がっている。

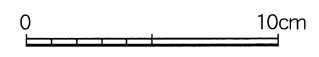
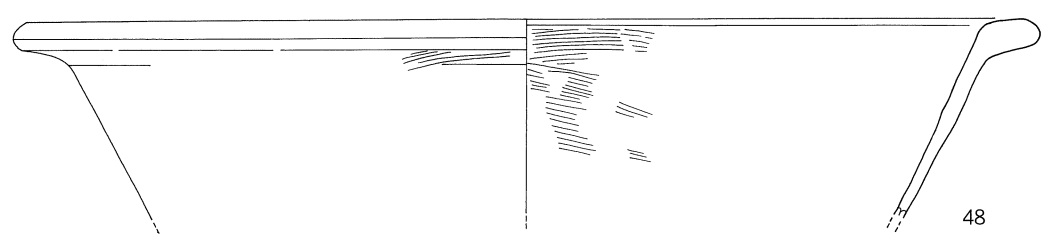
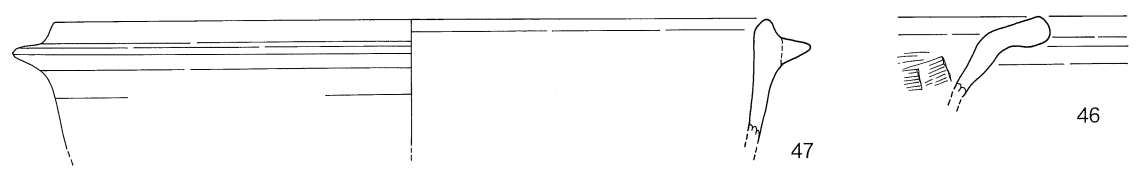
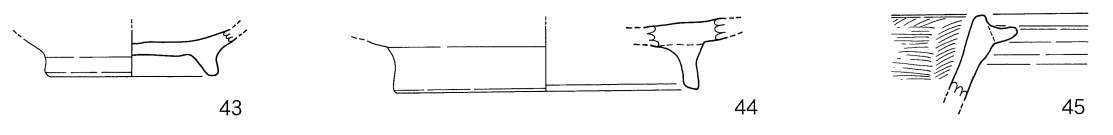
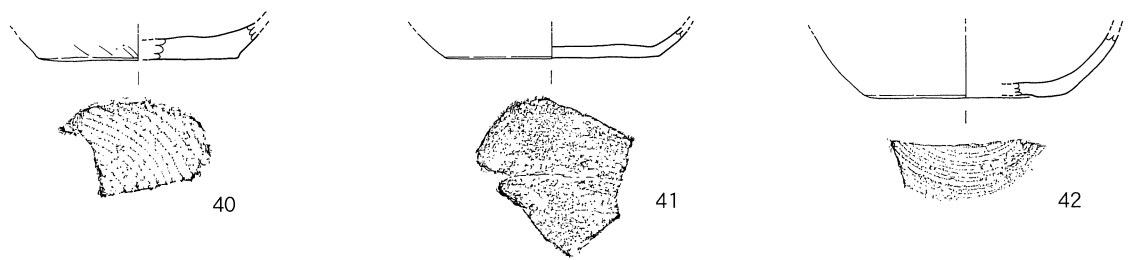
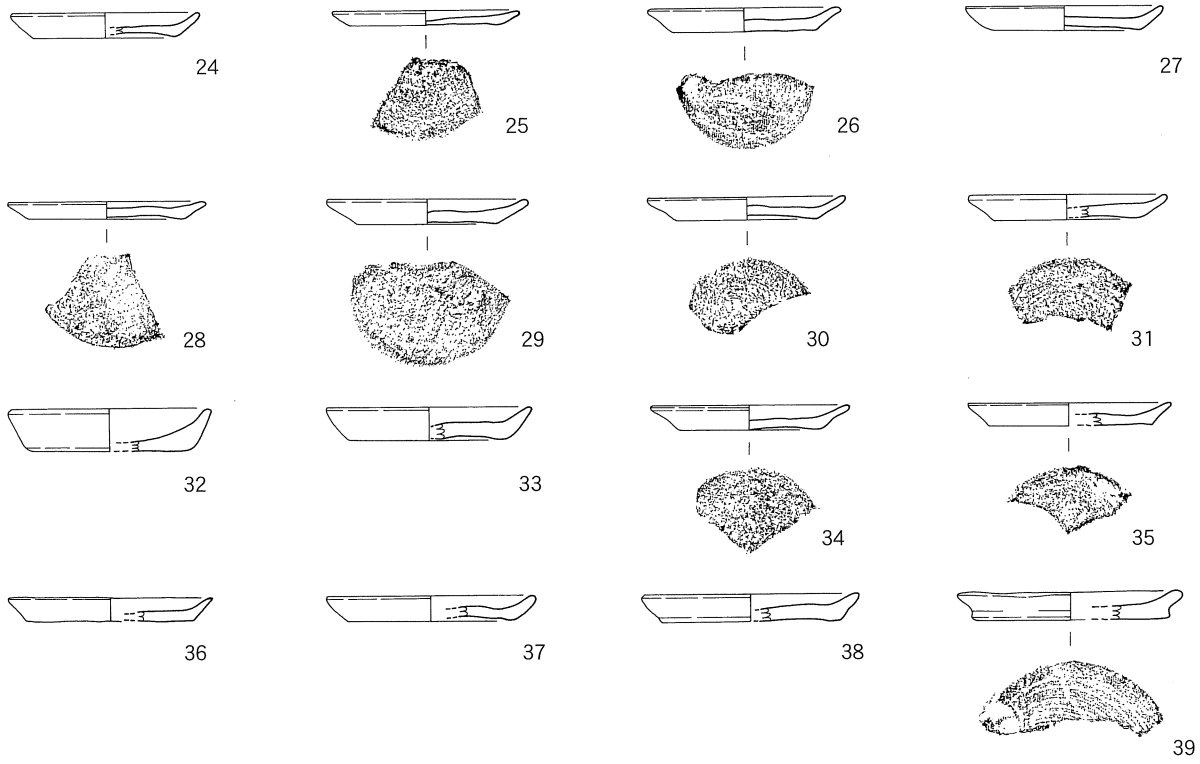
C区出土遺物

24～76はC区精査時に出土した一括遺物である。24～39は土師質小皿である。24の胎土には長石と角閃石が含まれる。内面調整は横ナデと不定方向ナデで、外面は横ナデと糸切り後の板状圧痕が残存する。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。復元口径7.4cm、器高1.0cm、復元底径5.6cmである。25の胎土には角閃石と赤色粒が含まれる。内面調整は横ナデで、外面は横ナデと糸切り痕を残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。復元口径7.4cm、器高0.6cm、復元底径6.0cmである。26の胎土には長石と赤色粒が含まれる。内面調整は横ナデで、外面は横ナデ及び糸切り後の板状圧痕が残存する。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。復元口径7.6cm、器高0.9cm、復元底径5.6cmである。27の胎土には長石・角閃石・石英・赤色粒が含まれる。内面調整は横ナデで、外面は横ナデと糸切り痕が残されている。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。口径7.8cm、器高1.0cm、底径5.9cmである。28の胎土には角閃石と赤色粒が含まれる。内面調整は横ナデで、外面は横ナデと糸切り痕が残存する。焼成は良好で、色調は内面が橙色で、外面は黄灰色である。復元口径7.8cm、器高0.7cm、復元底径6.2cmである。29の胎土には長石・角閃石・石英・赤色粒が含まれる。内面調整は横ナデと不定方向ナデで、外面は横ナデと糸切り痕が確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。復元口径8.0cm、器高1.1cm、復元底径5.6cmである。30の胎土には長石・角閃石・赤色粒が含まれる。内外面の調整は横ナデで、外面底部には糸切り痕が残存する。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。復元口径7.8cm、器高0.9cm、復元底径5.6cmである。31の胎土には長石と角閃石が含まれる。内外面の調整は横ナデで、外面底部には糸切り痕が確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。復元口径7.8cm、器高1.0cm、復元底径5.6cmである。32の胎土には角閃石・赤色粒・茶色粒が含まれる。内外面の調整は不定方向ナデで、外面底部は劣化のため調整不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに黄褐色である。復元口径8.0cm、器高1.6cm、復元底径6.1cmである。33の胎土には長石・角閃石・赤色粒が含まれる。内外面の調整は横ナデで、外面底部は劣化のため調整不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄褐色である。復元口径8.0cm、器高1.3cm、復元底径6.0cmである。34の胎土には角閃石と赤色粒が含まれる。内外面の調整は横ナデで、外面底部には糸切り痕が残されている。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。復元口径7.8cm、器高1.0cm、復元底径5.6cmである。35の胎土には長石と角閃石が含まれる。内外面の調整は横ナデで、外面底部には糸切り痕がみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄褐色である。復元口径8.0cm、器高0.9cm、復元底径6.4cmである。36の胎土には石英・角閃石・赤色粒が含まれる。内面調整は不定方向ナデで、外面は横ナデであるが外面底部は劣化のため調整不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄褐色である。復元口径8.0cm、器高0.9cm、復元底径6.6cmである。37の胎土には長石・角閃石・赤色粒が含まれる。内面調整は横ナデと不定方向ナデで、外面は横ナデと糸切り痕が残存する。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄褐色である。復元口径8.2cm、器高1.0cm、復元底径6.6cmである。38の胎土には長石・角閃石・石英・赤色粒が含まれる。内面調整は横ナデと不定方向ナデで、外面は横ナデと糸切り痕が確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。復元口径8.6cm、器高1.1cm、復元底径7.0cmである。39の胎土には長石と角閃石が含まれる。内外面の調整は横ナデで、外面底部には糸切り痕が残存する。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。復元口径8.8cm、器高1.1cm、復元底径7.8cmである。

40～42は土師質杯である。40の胎土には石英・角閃石・赤色粒が含まれる。内面調整は不定方向ナデで、外面は横ナデ・ハケ目・糸切り痕がみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに茶褐色である。復元底径7.6cmである。41の胎土には赤色粒が含まれる。内面調整は不定方向ナデと横ナデで、外面は横ナデと糸切り痕が残存する。焼成は良好で、色調は内外面ともに明黄褐色である。復元底径8.4cmである。42の胎土には長石と赤色粒が含まれる。内外面の調整は横ナデで、外面底部には糸切り痕が残される。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄白色である。復元底径7.6cmである。

43は土師質椀、44は脚付皿である。43の胎土には長石と角閃石が含まれ、内外面の調整は横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。復元高台径6.8cmである。44の胎土には角閃石と赤色粒が含まれ、内外面の調整は横ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。復元底径12.0cmである。

45～48は土師質土鍋である。45の胎土には角閃石が含まれる。内面調整はハケ目で、外面は横ナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内面が明黄褐色、外面は暗褐色である。外面には部分的に煤の付着がみられる。46の胎土には長石・角閃石・赤色粒が含まれる。内面調整は横ナデとハケ目で、外面は横ナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内面が明黄褐色、外面は黒褐色である。外面には部分的に煤の付着がみら



第9图 C区出土遗物实测图(1)

れる。47の胎土には長石・角閃石・赤色粒が含まれ、内外面の調整は横ナデである。焼成は良好で、色調は内面が明黄褐色、外面は黒褐色である。外面には部分的に煤の付着がみられる。復元口径28.2cmである。48の胎土には長石・角閃石・赤色粒が含まれる。内面調整はハケ目で、外面は横ナデとハケ目である。焼成は良好で、色調は内面が明黄褐色、外面は黒褐色である。外面には部分的に煤の付着がみられる。復元口径39.8cmである。

24～48は13～14世紀代を中心とする遺物群と考えたい。

49～59は瓦器碗である。49の胎土には長石と角閃石が含まれ、内外面の調整は劣化のため不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色である。復元高台径6.8cmである。50の胎土には砂粒が含まれ、内外面の調整は横ナデと不定方向ナデである。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰白色である。復元高台径6.0cmである。51の胎土には角閃石と砂粒が含まれる。内面調整は剥離のため不明で、外面はヘラ状工具痕と不定方向ナデをわずかに残している。焼成は良好で、色調は内外面とも明黄褐色である。復元高台径6.8cmである。52の胎土には砂粒がわずかに含まれる。内外面の調整は剥離のため不明である。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色である。復元高台径5.9cmである。53の胎土にはわずかに砂粒が含まれる。内面調整はヘラミガキで、外面は横ナデ・不定方向ナデ・指圧痕が残存する。焼成は良好で、色調は内面が灰白色、外面が灰色である。復元高台径6.2cmである。54の胎土には角閃石が含まれる。内面調整はヘラミガキで、外面は指圧痕・横ナデ・不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに灰色である。復元高台径6.8cmである。55の胎土には角閃石と砂粒が含まれる。内面調整はヘラミガキで、外面はヘラ状工具痕と不定方向ナデがわずかに観察できる。焼成は良好で、色調は内面が黒灰色と灰白色、外面は灰白色である。復元口径16.2cmである。56の胎土には長石・角閃石・砂粒がわずかに含まれる。内面調整は劣化のためわずかにヘラミガキが確認できる。外面調整は指圧痕・不定方向ナデ・ヘラ状工具痕を残している。焼成は良好で、色調は内外面ともに黒灰色と灰白色である。復元口径15.6cm、器高5.8cm、復元高台径6.0cmである。57の胎土には角閃石と砂粒が含まれる。調整は劣化のため不明瞭であるが内面に指圧痕、外面には不定方向ナデがわずかに確認できる。焼成は良好で、色調は内外面ともに黒灰色である。復元高台径6.8cmである。58の胎土には長石・角閃石・砂粒が含まれる。内面調整は劣化のため指圧痕がわずかに確認できる。外面調整は指圧痕・ヘラ状工具痕・不定方向ナデが残存する。焼成は良好で、色調は内外面ともに黒灰色・灰白色・黄褐色である。復元口径15.8cm、器高5.7cm、復元高台径6.6cmである。59の胎土には長石・角閃石・砂粒が含まれる。内面調整はヘラミガキで、外面は横ナデ・不定方向ナデ・指圧痕が残存する。焼成は良好で、色調は内外面ともに黒灰色と灰白色である。復元口径16.4cm、器高5.5cm、復元高台径6.8cmである。

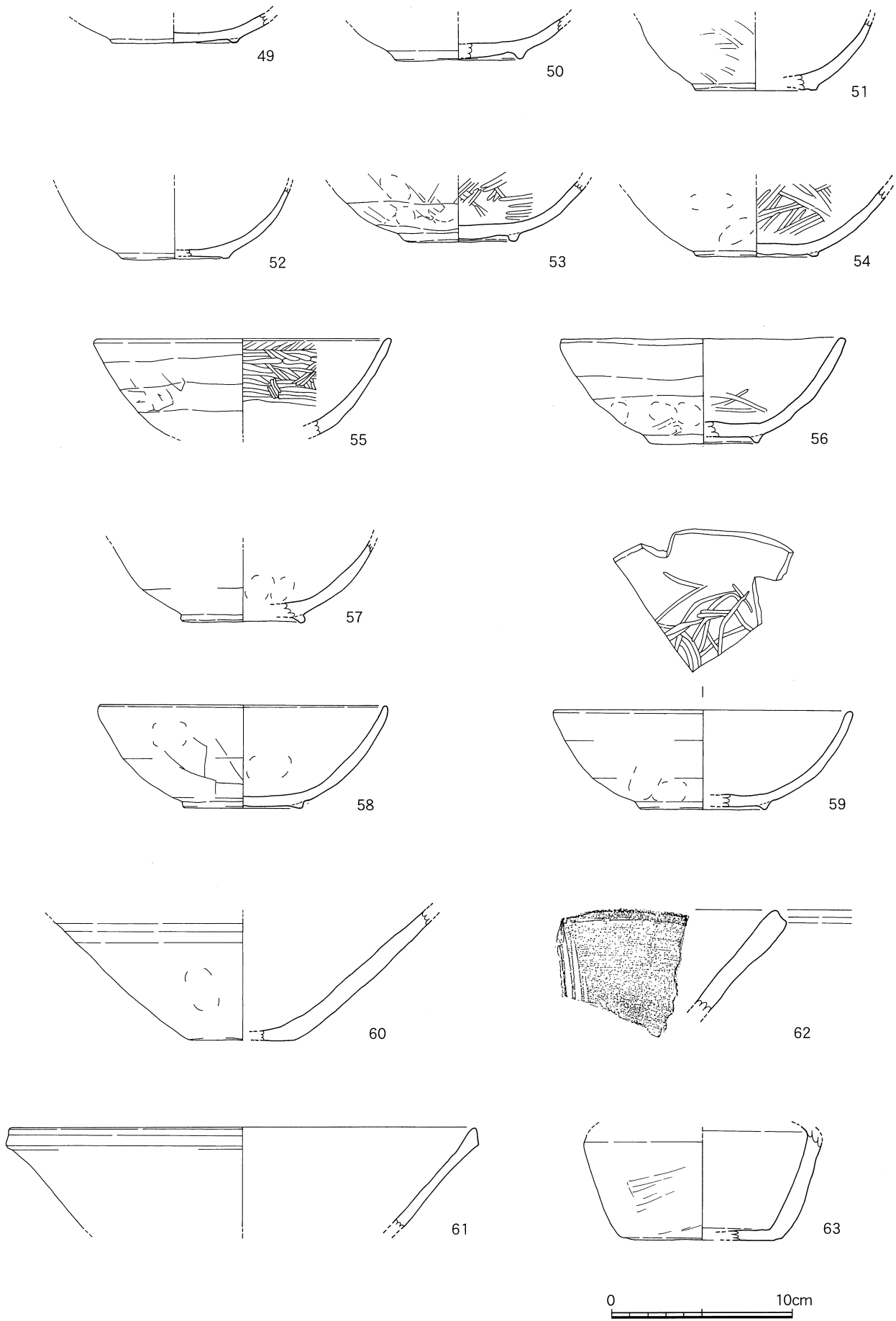
49～59は13世紀中頃から14世紀初頭を中心とする遺物群と考えたい。

60は瓦質捏鉢、61は東播系捏鉢、62は瓦質播鉢である。60・61の胎土には砂粒が含まれる。ともに内外面の調整は横ナデと不定方向ナデで、60の外面には指圧痕が残存する。それぞれ焼成は良好で、色調は内外面ともに黒灰色である。60の復元底径5.6cm、61の復元口径25.4cmである。62の胎土には石英と赤色粒が含まれる。内面調整はハケ目とカキ目で、外面は不定方向ナデがみられる。焼成は良好で、色調は内外面ともに淡黄褐色である。

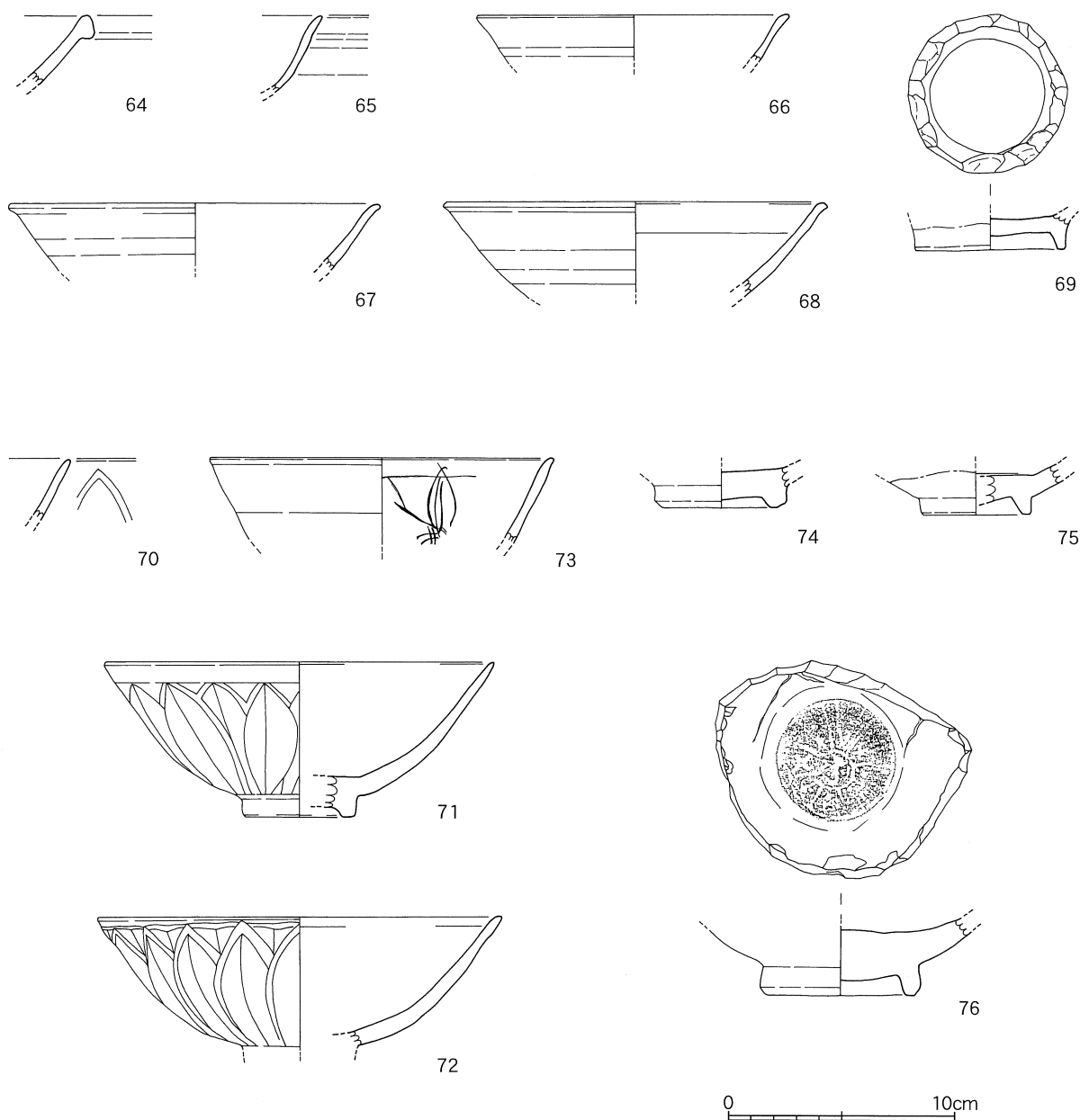
63は瓦質小壺で、胎土にはわずかに石英・赤色粒・茶色粒が含まれる。内面調整は横ナデで、外面は横ナデとハケ目がみられる。焼成は良好で、色調は内面が茶褐色、外面は淡黄褐色である。復元底径8.8cmである。

60～63は14世紀代を中心とする遺物群と考えたい。

64～76は輸入磁器である。64は白磁碗（Ⅳ類-？）である。胎土は灰白色で黒色粒が含まれ、釉は灰白色で厚めに施釉されている。65は白磁碗（Ⅸ類-？）で、口縁端部の釉をカキ取る口禿である。胎土は灰白色で黒色粒が含まれ、釉は薄く空色を帯びた白色である。66～68は白磁碗（Ⅴ類-？）である。胎土はともに灰白色で黒色粒が含まれる。釉色はともに灰白色で、68の体部内面上半には浅い沈線が1条確認できる。66の復元口径13.6cm、67の復元口径16.1cm、68の復元口径16.8cmである。69は白磁碗（Ⅷ類-？）である。胎土は灰白色で黒色粒が含まれ、灰白色の釉が施されている。見込みの釉は輪状にカキ取られており、高台部外面から高台内は無釉である。高台径は6.4cmである。70は龍泉窯系青磁碗（Ⅰ類-5-a）である。胎土は淡灰色で、釉色は青味がかかった緑色である。外面には蓮弁文がみられる。71・72は龍泉窯系青磁碗（Ⅰ類-5-b）である。ともに胎土は淡灰色で、釉色は青味がかかった緑色である。外面にはそれぞれに鎬蓮弁文がみられる。71の復元口径17.0cm、器高6.8cm、復元高台径6.8cm、72の復元口径19.6cmである。73は龍泉窯系青磁碗（Ⅰ類-2-？）である。胎土は淡灰色で、釉色は青味がかかった緑色である。内面には蓮花文がみられる。復元口径15.0cmである。74・75は龍泉窯系青磁碗（分類不明）である。ともに胎土は淡白色で、釉色は青味がかかった緑色である。74は高台部畳付から高台内が、75は体部下半から高台内までがそれぞれ無釉である。74の高台径6.8cm、75の高台径4.9cmである。76は青磁碗である。胎土は橙色で、釉色は青味がかかった緑色である。見込みは無釉でスタンプが施され、高台部畳付から高台内は無釉である。高台径は6.6cmである。64～75は13世紀代、76は15世紀代の遺物と考えたい。



第10图 C区出土遺物実測図(2)



第11図 C区出土遺物実測図(3)

IV. まとめ

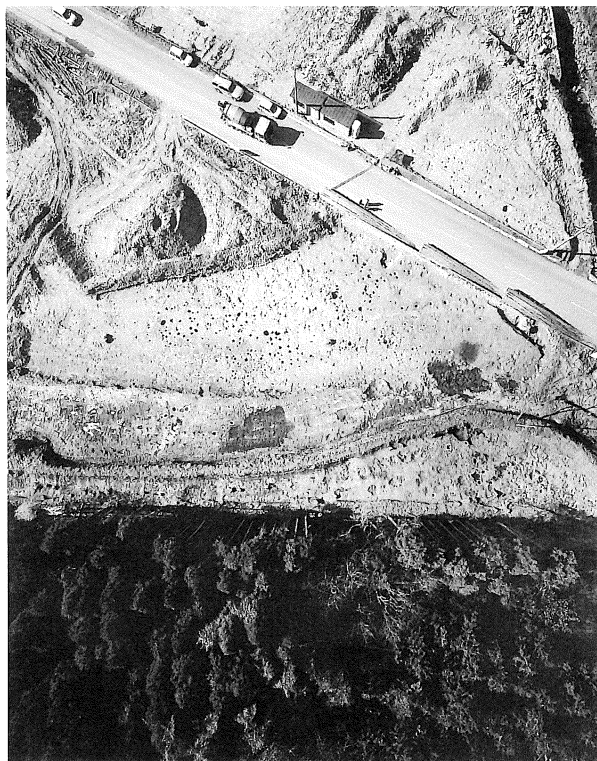
富貴寺遺跡は周知のとおり富貴寺を中心としたもので古代から中世の遺構・遺物が包蔵されている。盛時の富貴寺には南之坊・大門坊・妙蔵坊・東之坊・中之坊・谷之坊の六坊が存在していたことが知られており、各坊の成立がいつ頃に遡れるのかは判明していないが、東之坊・中之坊以外の坊についてはその所在地が推測^註されている。当該区はその立地条件等から未だ判然としない東之坊跡と推定されたため調査を実施した。

調査の結果、掘立柱建物跡2棟、土坑1基、焼土硬化面、柱穴群を確認したが時期・性格を特定するには至っていない。遺物は輸入磁器(坏・碗)、土師質土器(小皿・坏・椀・脚付皿・土鍋)、瓦質土器(こね鉢・播鉢・小壺)、瓦器(椀)、頁岩製硯等の生活に密着したものを中心に出土している。遺構・遺物から当該調査区が僧坊跡とは断定できないが、富貴寺関連の活発な活動を裏付けるものとなった。しかし、遺物の多くが客土内(石垣裏込め土)から出土していることから、調査区周辺にその活動の起源を求めることも可能で、遺物構成から13~15世紀代を中心とする時期に盛期を迎えるものと推定される。当該調査の精妙な位置付けについては今後の考究によるものとした。

註 『豊後國田染荘の調査』I 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 1986 42~46頁



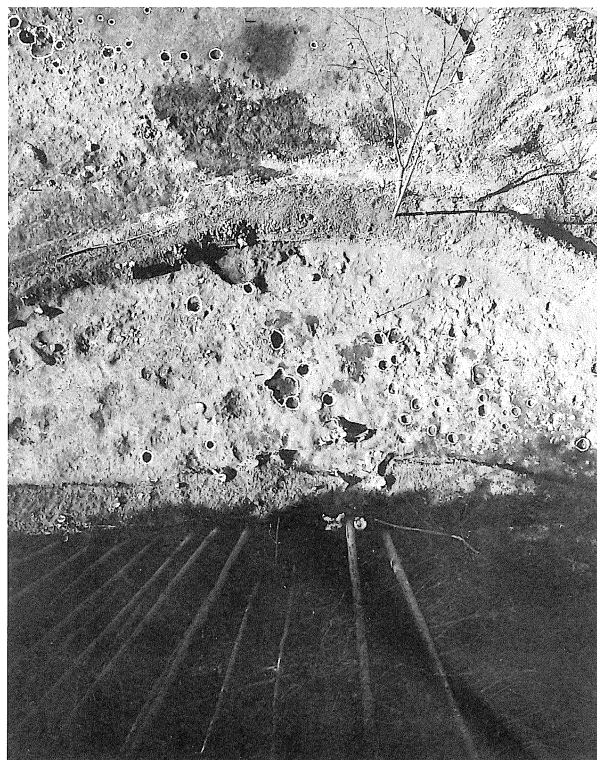
富貴寺遺跡(東地区)遠景



富貴寺遺跡(東地区)調査区全景

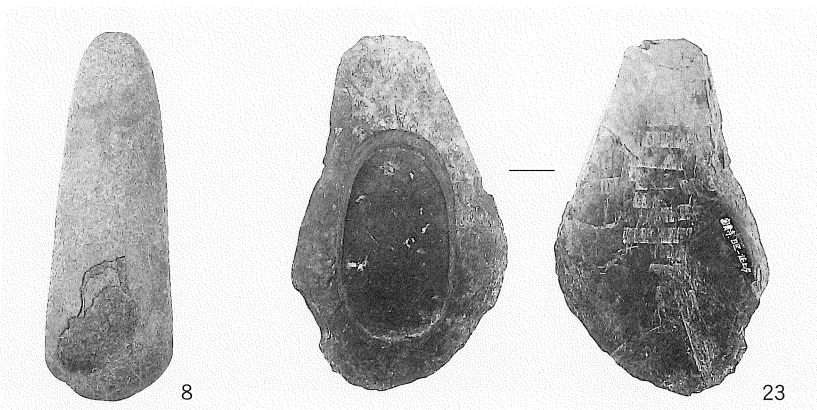
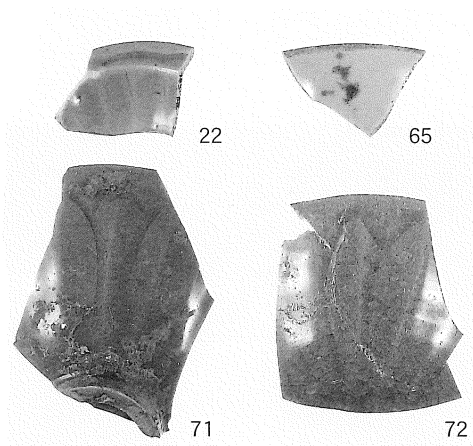
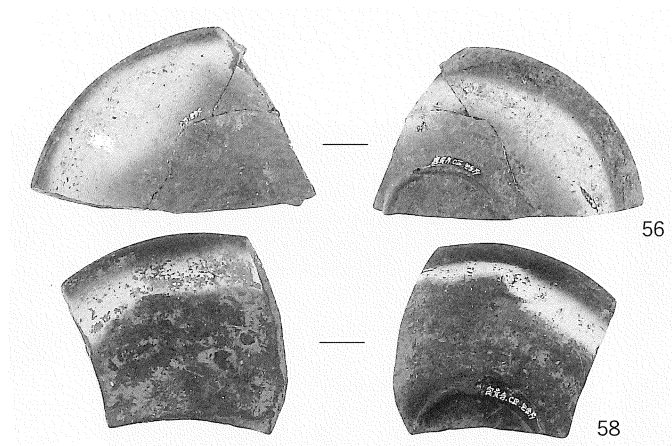
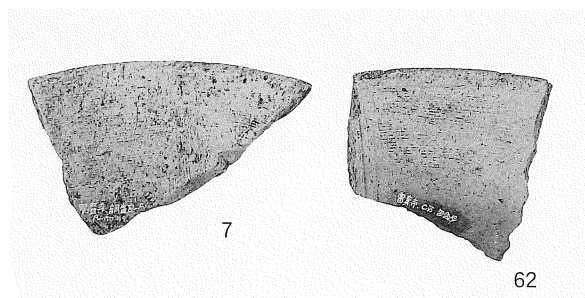
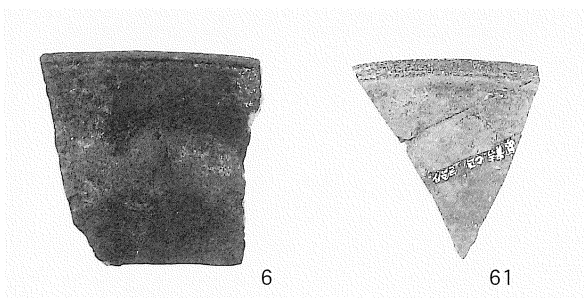
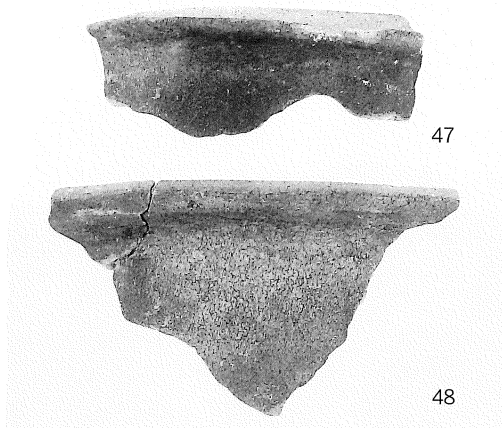
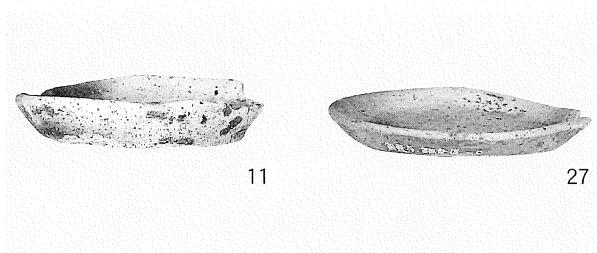


富貴寺遺跡(東地区)調査区近景



富貴寺遺跡(東地区)調査区近景

图版 2



フリガナ	フキジイセキ(ヒガシチク)		
書名	富貴寺遺跡(東地区)		
副書名	落川火山砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		
巻次	—————		
シリーズ名	大分県文化財調査報告書		
シリーズ番号	第117輯		
編著者	栗原 眞 染矢和徳 戸崎 文		
編集機関	大分県教育委員会		
所在地	〒870-0021 大分県大分市府内町3-10-1		
発行年月日	2001年1月31日		

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
フキジイセキ 富貴寺遺跡 ヒガシチク (東地区)	オオイトケン 大分県 ブンゴタカダシ 豊後高田市 オオアザフキ 大字路 アザナカタ 字中田	44209	102116	33°32'05"	131°32'05"	20000214 ～ 20000314	2000m ²	落川火山 砂防事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
富貴寺遺跡 (東地区)	寺院	中世	掘立柱建物跡 土坑 包含層 ピット群	土師質土器 瓦器 瓦質土器 輸入磁器 硯	—————

大分県文化財調査報告書第117輯

蒨川火山砂防事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

富貴寺遺跡(東地区)

平成13年1月31日 発行

編集・発行者 大分県教育庁文化課
〒870-8503 大分市府内町3-10-1
TEL(097)536-1111(内5501)

印刷所 日の丸印刷株式会社